

③神の発生などということは知らないが、原始絵画などに説明されている呪術など、色々あるが、なにはともあれ超自然物としての創造神、自然の脅威などが、単独に、或は権力と結びついて、神々は誕生したのだろうか、ダーウィンの進化論の進化させる側のものを神、自然と呼んでみれば、やや神は明日になるのではなかろうか。それは神という概念を創造する知恵というより、必要とした弱さが、体質的に人間発生の段階にあったのだろうか。何故なら、いかなる民族といえども、それぞれの神を持つ歴史があるからだ。

自然科学的にいえば、人間の歴史、あるいは進化は、順応の連続とみなされる。それは何に対して順応したのか。原則的にいえば、無機物から発生した、有機物の悲しみとでもいえばいいのか、無機物たる地球（重力、太陽などの宇宙）と、少々の微生物たちとの、闘争をとおしての無機物の歴史にはほかならないのだ。だから人間が自力での原始生活であれば、それだけ無機物の威力は大きかった。地震、嵐は、それだけで偉大な黒い太陽だったのではなかろうか。

A、キリスト教など立派な宗教が発生したが、所詮、その辺の関係は同じなのだろう。何故なら、いつきよに、無機物を人間の力以上に発揮させた蒸気機関の発明によって、ブルジョアが権力者となって出現し、プロレタリアが生まれたのは承知のとおりで、神々の死が始まったのだ。それまで宗教と権力はイクオールであったものが宗教を大きく引きはなし、権力ブルジョアが神の加護を受けずに君臨するとともに、ショウペンハウエル、ニイチエなどの思想がだんだんと神を圧迫し、蒸気機関の発明よりも大きい原子核が開発された今日、精神界ではいわゆるサルトルの出現によって、神なきニヒリズムが開花したといわれる。

B、神と人間、自然と人間 人間はいくら文明が発達したといっても自然の力は王様より、僧侶より強かった。勿論、現代といえども、強いに決まっているが、人間の力で自然を超えられることが明瞭になった今日、誰が神を信ずる程、オメデタイだろうか。だからこそすべての宗教はいつきよに趣味に低俗化し、彼女と彼氏との教養番組のサロンと化してしまったのだ。ここに至り、神に対し人間であった人間が再び「人間」とはと問う必要にせまられたのもまた事実だ。

C、例えば、人間とは地球上に住む動物である。というのが人間発生以来の神から規定された掟だった。そして、この動物は神話、童話の世界では星に行ってみることは許されていたが、人間そのものが地球を脱出できるとは夢にも思っていなかったのだ。それだけでも、もう一度、人間とはという問いを発しなければならない。無機物を征服した、即ち、ひたすら無機物に同化して来た 弱い有機物生物。同時に、それはどんな時にも、無機物としての自然のお手本があったのだ。神さまの加護で、あるいは嵐のように男らしく。その他、いろいろ人間が生きていくためのお手本があり、それを、いままでの人間は実践していけばよか

ったのだが、「人工衛生」「二つの頭をつけられた犬」などの出現によって、いきよにお手本が消滅してしまったのだ。神々は、本当に死んでしまったのだ。だがしかし、お手本のなくなってしまった現在も、人間は長い順応で条件反射になってしまったのか、いまだに「なにか」を求めて、悲劇誕生に努力しているのが現状ではないかと思うのは、私ひとりの独断でもあるまい。